

事業実施結果報告書

障害者芸術文化活動普及支援事業

団体名称	社会福祉法人 みぬま福祉会	代表者	理事長 高橋孝雄
所在地	埼玉県川口市木曾呂1445		
事業担当者	宮本恵美		
連絡先	048-290-7355	メールアドレス	kobo-syu@marble.ocn.ne.jp

1 事業概要・成果報告

<p>取り組んだ事業の概要、事業実施により得られた成果</p> <p>※できる限り具体的に記入すること</p>	<p>●取り組んだ事業の概要</p> <p>埼玉県では平成21年度から埼玉県障害者アートフェスティバルを行い、「障害者アート」に積極的・先駆的に取り組んできた土台がある。平成28年度当法人が「障害者の芸術活動支援モデル事業」を受託したことに伴い、埼玉県障害者芸術文化活動支援センター「アートセンター集」を設置し、「障害者アート」の推進を目的に活動する中間支援組織として位置付いたのは大きな成果であった。引き続き本事業を受託したことで、「福祉の現場から、障害のある人たちの表現の魅力を発信し、そのアートのパワーで、よりよい未来をつくっていきましょう！」といった思いを一つに、県や協力委員、TAMAP±0参加団体・メンバーをはじめ、作家や家族、さまざまな機関や専門家、地域の人たちなど、多くの人々が力を合わせて活動してきた。</p> <p>埼玉県障害者芸術文化活動支援センター（通称「アートセンター集」）を運営し、①相談支援②人材育成のための研修や、昨年立ち上げた③「埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±0（タマッププラマイゼロ）」と共に④参加型展示会、ダンス公演を行った。また⑤協力委員の方々には本事業に随時関わっていただき、⑥調査・発掘⑦評価・発信では、県と連携して「表現活動状況調査」を行い、県や協力委員、TAMAP±0参加メンバーで「作品選考会」を行った。</p> <p>●事業実施により得られた成果</p> <p>(1) 埼玉県障害者芸術文化活動支援センター「アートセンター集」</p> <p>相談支援は1年を通して相談に対応した。アートセンター集が知られるようになり、相談件数も昨年より増え、創作環境に関する相談には、表現活動を20年以上行っている当法人の経験を活かし、創作環境を積極的に公開して対応してきた。個別の課題については、多くが地域の教育、支援学校や福祉施設の在り方など、社会全体の課題につながることを痛感した。対応に追われた感が否めないが、長年当法人が培ってきた組織内の知恵や、本事業のネットワークや専門家との連携を活かして、丁寧に対応した。「障害者アート」の推進を目的に活動する中間支援組織の役割を担い、県内外の障害者アート活動を結び付け、発展させることのできるコーディネートの役割を果たしてきていると考える。</p> <p>(2) 福祉の現場から発信する人材育成</p> <p>当法人は戦略的にアート活動を取り入れたわけではなく、障害の重い人たち、困難な人たちを受け入れてきた中で、従来の仕事に合わなかった人に向き合った結果見つけたのがアート活動である。それしかできない人たちやそれが必要な人たちから始まったが、特別な人の特別な活動にせず、どんなに障害が重くとも表現の可能性があると、表現の活動を平等に保障してきた。平等に保障してきたといっても決してシステムチックなプログラムを提供したわけではなく、人間対人間の関わりの中で、介助や支援の延長上であったり、メンバー間の集団の中で、お互い育ちあい、高めあったり、労働なのか余暇なのか暮らしなのか非常に曖昧な中から生まれる作品たちは、多くの人たちの心を動かし、多くの人々の価値観を変えてきた。このところの「障害者アート」の機運の高まりで、「障害者アート」を取り入れたい、やってみようという施設が増えているが、何のために、誰のためのアート活動なのかを見誤ると結果的に障害のある人が被害を受けることになる。何のために、誰のためのアート活動なのかという各々の施設の考え方を作る事、関わる人たちの意識を変えることという根幹の部分の“人材育成”が、障害者アートの裾野を広げるために必要なことである。今年度の事業実施により福祉現場の人にとってはかなり深い意味での人材育成を実施することが出来たのではないと思う。</p> <p>(3) 障害者アートを一部の特別な人たちだけのものにしなないために</p>
--	--

	<p>「埼玉県障害者アートネットワークTAMAP士〇」というネットワーク構築を行うことにより、他分野他業種の方々とつながり、協働で障害者の芸術振興を実施することができた。どんな障害のある人にも表現の可能性はあるという思いを共有していくことが出来てきていると思われる。</p> <p>(4) 埼玉方式の障害者アート支援を全国に広めていく</p> <p>この取組を続けることで、自身の生きがいが生み出され、人によっては才能を開花させることができる。また、一般の人の障害者への偏見、併せて身近な家族、施設職員らが知らず知らずに陥っている障害者への能力軽視をなくすることができる。この「福祉」と「芸術」の両方に着目して効果を上げる「埼玉方式の障害者アート支援」を今回の本事業の取り組みで更に深化させることができたのではないかと。また報告書を通してやってきたことを形にすることができた。これを元に汎用性の高い障害者問題の解決モデルとして全国に広めていきたいと考えている。</p> <p>※成果物</p> <ul style="list-style-type: none"> ・厚生労働省「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業」@埼玉アートセンター集報告書 ・第8回埼玉県障害者アート企画展作品集
--	---

2 事業実績 ※組織図、事業イメージ図等がある場合は添付すること

事業内容及び手法

※下記(1)については、支援センターを実施した団体のみ記入すること。

(1)支援センター(都道府県レベル)

<p>①相談窓口の体制(人数や勤務体制等)</p> <p>※窓口担当が不在時の対応等についても記入すること。</p> <p>※専門家アドバイザーも含め、どのような相談体制で事業を実施したのか、できるだけ具体的に記入すること。</p>	<p>担当者：常勤1名 非常勤1名 外部専門家アドバイザー：弁護士1名 美術専門家4名 相談支援専門員3名</p> <p>対応時間： 10：00-17：00 設置場所：(社福)みぬま福祉会 川口太陽の家・工房集内(既存の場所) 対応方法：電話、メール、来所、訪問 相談件数：550件(「障害者の芸術活動支援モデル事業」連携事務局の集計方法に準じる)(H29年6月9日～H30年3月26日)</p> <p>主な相談内容</p> <p><美術> 当法人には創作活動に取り組む現場があるという強みがあることから、見学したいという相談が昨年同様に最多で、287名の見学者を受け入れた。見学に合わせて、創作環境や商品化、著作権等についての相談にも対応している。増加傾向にある相談として「充実させたい」「作品を発表したい」という作家や家族からの相談がある。昨年度から相談を継続している作家に関しては、公募展等の情報を提供してきたことで、実際に出展や入選につながったケースもある。</p> <p>作品を見てほしいという相談で対応したが、福祉的支援が必要なケースだと判断し、相談支援専門員へつなげた。その後、生活介護事業所への入所が決まった。</p> <p>昨年度の課題でもあった大学等とのつながりとしては、大学内で展覧会を開催したいという相談が2件あった。展覧会の開催だけでなく、創作活動の現場を見学できるよう対応したり、大学の講義内で作家が学生に自分の表現に対する思い等を伝える機会も設けることができ、学生へ障害者の芸術文化活動について発信することができた。</p> <p>創作活動を4年継続してきた施設からは、作品販売へも広がりを見せてきた中で、価格設定の方法や、著作権に関することなどの相談があった。美術専門家とともに施設へ訪問し、ただ専門家が一方的に作品の価格を決定するのではなく、まず美術業界の作品の価格の考え方のノウハウをご教授いただき、その後創作の背景についても語り合うことで、表現することそのものについて考えてもらい、施設内で共有する機会としながら対応した。</p> <p><舞台芸術> ダンス活動をしているグループから、ワークショップを企画していて参加者を募っているという相談があり、埼玉県障害者アートネットワークTAMAP士〇で共有し、実際に障害のある方が参加に至った。</p>
<p>②人材育成のための研修実績</p>	
<p>(ア)著作権等の権利保護に関する研修</p>	<p>(1)権利保護や商品化に関するセミナー</p> <p>H30.2.3/社会福祉法人みぬま福祉会 川口太陽の家 / 講師：岩本憲武(弁護士/モッキンバード法律事務所)、杉千種・山口里佳(con*tio) / 参加者</p>

※研修内容、回数、研修方法、講師等の実績についても記入すること。

数：50名
概要：
定員を50名に絞り、質疑応答などがしやすい環境で開催した。1部では権利保護に関する内容を岩本弁護士に、2部では商品化に関する内容をコーディネーターのcon*tioのお二人に依頼した。
障害のある方の創作の現場において知っておきたい基礎知識として、著作権に関する注意すべき点の講義を行った。施設と利用者における作品の所有権の所在の問題や、その際の契約にまつわる基礎知識や注意点を講義していただいた。具体的な事例を交え、難しい内容にも関わらず分かりやすく聞けたとの感想があった。
商品化に関する研修では、“商品は作っている人を社会に知ってもらえるツールであり、どう発信するのが大事”といった内容の、「なぜ商品化するのか」を主眼に置いた講義を、商品化までのプロセス等を紹介しながら行なった。商品化の際に注意すべき権利の問題などの講義もあり、2部がリンクした内容のセミナーとなった。

(イ)障害者への芸術文化活動の支援方法に関する研修

※研修内容、回数、研修方法、講師等の実績についても記入すること。

※(ア)と(イ)を同時に行った場合などは、それぞれの欄に表記し、注をつけるなど、明確に記入すること。

(1) <障害者芸術支援シンポジウム>「埼玉県の取り組みから考える」

H29. 12. 9/埼玉県立近代美術館 講堂/講師：前山裕司（埼玉県立近代美術館学芸員）、中津川浩章（美術家、アートディレクター）、松本哲（みぬま福祉会総合施設長）、野本翔平（NPO法人CILひこうせん）、佐藤佳織（みぬま福祉会大宮太陽の家）、多田美奈子（埼玉県社会福祉事業団あげお）、小澤基弘（画家、埼玉大学教育学部教授）、酒井道久（彫刻家、埼玉県立大学名誉教授）、石平裕一（NPO法人かうんと5代表）、豊田亜紀（多機能型事業所わつくす）/参加者数：104名

概要：
第8回障害者アート企画展の関連イベントとして開催。埼玉県内の表現活動や支援の取り組みを多角的に考察。美術、教育の専門家や福祉従事者の話から情報や知識を得るだけでなく、活動の広がりや今後について共に考える場となるよう、対談やトークセッションを中心に企画した。昨年度に続き定員を超える参加があり、県内における障害者芸術文化活動への関心の高さが伺えた。

●基調講演「好きと評価をめぐって」
概要：基調講演は協力委員である学芸員の前山裕司氏による、美術の専門家がどのように作品を評価するのかという講義を行なった。

●対談「重い障害のある人の表現とは」
概要：本展キュレーション中津川浩章氏と、重度の障害のある人に長く関わるみぬま福祉会総合施設長松本哲による、それぞれの立場からの、障害のある人の表現について語り合った。

●活動報告「埼玉県内の施設間のつながり、広がり、深まり」
概要：埼玉県内でアートに取り組んでいる福祉施設の活動を3人の登壇者が紹介。昨年度、TAMAP土〇を発足して繋がりを深め、障害のある人のために、共に学び合いながら高め合うことを大切にしているメンバーの活動の一部を紹介した。

●クロストーク「福祉、教育、美術など、様々な角度から見た障害のある人の表現の本質や展望」
概要：「表現活動状況調査」や「作品選考会」など障害者アートをめぐる埼玉県独自の取り組みについて、その意味合いと可能性を美術の専門家と福祉施設のスタッフがそれぞれの立場から語り合った。

(2) グッズ研修会

H29. 5. 22、H29. 5. 25、H29. 6. 26、H29. 6. 29、H29. 7. 24、H29. 7. 27、H29. 8. 24、H29. 8. 28、H29. 9. 2 / 川口太陽の家、工房集、アトリエ輪 / 参加者数：17団体（計35名） / 講師：杉千種、山口里佳（con*tio）

概要：
今年度は全9回の開催。講師に杉千種氏、山口里佳氏（con*tio）を招き、グッズにまつわる相談や作品の商品化に関する研修を行った。「何のための商品化なのか」の意識化をし、施設オリジナルアートグッズの開発及びクオリティの向上、さらに、グッズ展開（価格設定や流通、商品管理などの）知識を学ぶ機会とした。昨年度よりも参加団体が増え、グッズの種類や質も増々多種多様となった。施設間でのコラボ商品も数多く生まれ、施設間のつながりが深まる機会ともなった。

集大成として11月に開催した「うふっ♡埼玉でこんなものを見つけちゃった♪」織り&グッズ展ツグズムズ10では、181点もの商品が並ぶ展覧会となった。関連イベントとして行った野菜販売ではアート作品を活かしたエプロンを開発した。

	<p>(3)アトリエ見学ツアー 第1回H29.9.5第2回H29.11.7 第3回H30.2.5/川口太陽の家、工房集、アトリエ輪/参加者数：計52名</p> <p>概要： 工房集で行われる展覧会に合わせ、当法人アトリエ5か所を巡るアトリエ見学ツアーを実施。現場での創作の様子、障害のあるアーティストの変化や成長、職員の関わりを伝えることで、何のための、誰のためのアート活動なのかという土台にある理念、コンセプトを学ぶ。また展覧会も鑑賞し、工房集のカフェも堪能してもらい、カフェを運営しているみぬま福祉会後援会の方にも話しをしてもらった。外部に発信するためには、内部の意識改革、共有が必要だという事を伝えた。 参加者から表現活動には何が大切かを考えさせられたという感想を多くいただいた。</p> <p>(4)インターンシップ研修 H30.1.16/川口太陽の家、工房集/参加者数：6名</p> <p>概要： 表現活動の支援の在り方を共に考えることを目的に、川口太陽の家の3つのアトリエにて1日研修し、障害のある人の創作現場とスタッフとの関わりを、体験を通して学ぶ。 次年度表現活動を開始予定の施設や、更に表現活動を広げたいと考えている施設の職員と、美術を学ぶ学生の6名が参加。1日を通して利用者との関わりや表現活動に大切なことなどを学ぶ事が出来たと感想をいただいた。</p>
<p>③関係者のネットワークづくり</p> <p>※ネットワーク構築方法、ネットワークを活用した具体的な取組実績について、できる限り具体的に記入すること。</p>	<p>昨年度から発足している埼玉県障害者アートネットワークTAMAP士〇を今年度も継続。参加団体は増加し、現在は25施設。任意の団体であり、参加は強制ではないが、参加者は所属する施設・事業所にしっかりと業務として位置付けられている参加であり、複数人で参加している施設もある。</p> <p>●ネットワーク体制 ・アートセンター集が事務局。 定例会の議題提案、進行、記録。後日議事録をメールにて参加施設へ送り、共有。 ・埼玉県内を東西南北に分け、当該地域の担当とし、その地域の情報を網羅する役割とした。その地域で支部長施設を決め、支部長施設がその地域の福祉施設や個人などの情報を統括した。 ・適宜、協力委員や行政との連携を行った。</p> <p>●活動内容 ・月1回の定例会を開催。(年12回) ・展覧会(事業計画にある4つの展覧会)の企画、運営。 ・研修(事業計画にある研修計画)の実施。TAMAP士〇のメンバーは研修に参加する参加者でもありながら、運営側の役割も担った。シンポジウムでは3名が活動報告を行なった。 ・情報交換、悩み相談。 ・活動や作家を知ってもらおう。まだまだこれからの人を発掘。埼玉県を盛り上げる。想いをつなぎ、県内、そして全国に発信！→展覧会の情報を発信したり、TAMAP士〇の活動を知ってもらうための働きかけはアートセンター集のパンフと共に地道にコツコツ行った。</p> <p>ネットワークは展覧会を企画運営することだけが目的ではなく、すべての活動が人材育成につながっている。TAMAP士〇の展覧会実践で学んだことを、各施設でも実践してみたり、展覧会を観に行くことができるように各施設が取り組むことで、作家だけでなく周囲の変化も見られるという実感を積み上げてきている。</p>
<p>④参加型展示会・公演等の開催</p> <p>※展示会や公演等の成果発表の企画方法や開催について、その取組実績をできる限り具体的に記入すること。</p>	<p><参加型展示会> ・4つの連動する展覧会に、作家主体のイベントと支援力を高める研修を絡めて、TAMAP士〇の連携力や協力委員の専門性を活かしながら、障害のある人たちを取り巻くさまざまな人と協力して、表現やその支援を広める活動を実施した。また、今年度は、美術以外の表現活動にも支援を広げ、ダンスワークショップ&公演も実施した。</p> <p>①タイトル：「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」展 会期：平成29年8月22日(火)～9月2日(土) 出展者数：(障害あり 22名/障害なし 0名)計 22名 来場者数：(障害あり 名/障害なし 名)計 459名 ※障害有無での集計はしていませんが、約60%は障害のある人です。</p>

取組について：

●支援センターの展示会として留意した点

- ・12月に開催する障害者アート企画展に向けてのキックオフ展として開催。
- ・協力委員であるキュレーターの中津川浩章氏を定例会に招き、担当職員らと共に作品の魅力を語り合いながら選考できるよう設定した。
- ・会場となった東部地域のフォロー。

●当該都道府県のどのような特性を活かし、あるいは課題を意識して企画をしたのか

- ・埼玉県のみであるネットワークを活かし、県東部地域を中心に開催した。
- ・担当支部を主体とし、地域間の連携を促進するような企画を行った。
- ・担当支部の提案を元にしながら、「ちょっと変だけど面白い」をコンセプトに作品選考を行い、その新鮮な驚きと多様性を見せた。

●どのような人々が関わったか

- ・会場スタッフ業務は、県東部地域の施設職員が中心となりTAMAP土〇メンバー全体でバックアップしながら実施した。
- ・協力委員である中津川浩章氏にキュレーションを依頼。企画、作品選考、設営業務に協力していただいた。
- ・会場は事業所が運営する喫茶店になっており、出展作家である利用者本人がカフェ業務を兼ねて会場スタッフとして関わった。
- ・アーティストトークには出展作家本人・ご家族・施設職員が登壇。会場に人が入りきらない程の盛況となった。

●来場者の反応や感想

カフェという特性を活かし、食事を目的に訪れたが作品に関心を寄せたり、展覧会をきっかけにカフェを知ったりとカフェならではのつながりや広がり

が生まれた。

以下、感想の一部を抜粋。

- ・食事をとりながらのんびりした雰囲気の中で作品を楽しむことができた。
- ・全体的にレベルが上がったような気がする。
- ・一つ一つの作品をじっくり見られるような配慮がなされている感じを受けました。

②タイトル：「うふっ♡埼玉でこんなみつけちゃった♪」織り&グッズ展
ツグズムズ10

会期：平成29年11月1日(水)～11月12日(日)

出展者数：(障害あり 181名/障害なし 0名)計 181名

来場者数：(障害あり 名/障害なし 名)計 782名

※障害有無での集計はしていませんが、約60%は障害のある人です。

取組について：

●支援センターの展示会として留意した点

- ・5月より計9回開催してきたグッズ研修会の集大成として開催。単に売れる商品を作るのではなく、「何のための、誰のための商品化なのか」を研修に参加した皆で考えていく事を意識し、グッズ研修に参加した全施設が本展示会に出展できるよう留意した。

●当該都道府県のどのような特性をいかし、あるいは課題を意識して企画をしたのか

- ・埼玉県全域から様々な施設・団体がグッズ研修に参加した為、クオリティの高い多種多様なグッズを、購買意欲を掻き立てるようなお洒落な雑貨屋さんをイメージして展示販売した。
- ・全ての参加施設に対して、1つの商品を取り上げたグッズの生まれた背景が伝わるような販促掲示物を制作した。
- ・研修の回数を重ねていくうちに、他施設間のつながりが深まっていき、施設間コラボレーション商品が昨年度よりも増加した。

●どのような人々が関わったか

- ・グッズ研修会から展示プランまで、協力委員であるコーディネーターの杉千種氏、山口里佳氏 (con*tio) に協力していただいた。
- ・TAMAP土〇メンバーにかぎらず、作品の商品化や、授産製品などにまつわる悩みのある方々が研修会から参加。展示作業や会場スタッフにも協力をお願いした。

・関連イベントとして作家本人が行うステンドグラスのワークショップ、漫画・書・絵画・ぼやきなど多様なライブパフォーマンスを実施した。

●来場者の反応や感想

グッズ展の来場者は30代が多く、50～60代が多い作品展と比べ、若い世代が障害のある人の商品に関心を持っていることがアンケートを通して分かった。

以下、感想の一部を抜粋。

- ・織り&グッズ展を毎年楽しみにしています。障害者アートであることを抜きにしても、作品（商品）の仕上がりの質が高く値段以上のものであると思います。何が飛び出すかわからない所も毎年の楽しみの一つです。
- ・多様な商品があり、十分に楽しむことができた。商品はいずれも色彩豊かで丁寧なもので、値段も妥当だと思った。このような作品展で重要なのは、同情心で購入してもらうのではなく商品の質と価格を納得して購入してもらうことだと思う。

③タイトル：第8回障害者アート企画展「うふっ♥埼玉でこんなのを見つけちゃった♪」

会期：平成29年12月6日（水）～12月10日（日）

出展者数：（障害あり 97名／障害なし 0名）計 97 名

来場者数：（障害あり 名／障害なし 名）計 1,965 名

※障害有無での集計はしていませんが、約60%は障害のある人です。

取組について：

●支援センターの展示会として留意した点

- ・事務局や美術の専門家のみで作り上げるのではなく、ネットワーク全体で展示会を作り上げていけるよう毎月の定例会にて話し合える場を設けた。
- ・「評価・発掘」に絡めた展示会として、本展の選考の元となる「表現活動状況調査票」の配布・回収・整理を、県政職員と事務局が担当。
- ・9月に開催した作品選考会では、福祉施設の職員と協力委員である美術の専門家が共にディスカッションできる形式で選考を行い、600件にも及ぶ調査票から97名の出展作家を選出した。
- ・展示会に向けての各施設・作家に対する個別のフォロー（額装・梱包の仕方、会場スタッフの体制手配など）。

●当該都道府県のどのような特性をいかし、あるいは課題を意識して企画をしたのか

- ・埼玉県のアーティストの数、層の厚さ、作品のクオリティを一堂に見せられるよう意識し、300点を超える作品を展示した。特に近年、作品なのかどうかも分からない作品が多く生まれているという埼玉の特徴を、どのように展示すれば社会に問いかけられるかを特に意識した。
- ・埼玉県が平成21年度から行っている「表現活動状況調査」による調査・発掘は連携して行うことができた。
- ・埼玉のネットワークによる連携力の強さを活かした展示会の企画・運営。
- ・次の展示会への集客を兼ね、本展と連動した企画として来場者投票を企画。作品1点1点をじっくりと見てもらえるよう、観客への鑑賞支援として行なった。

●どのような人々が関わったか

- ・9月に実施した作品選考会には、TAMAP土〇メンバー、協力委員である美術の専門家や弁護士、県の職員を交えて総勢47人で開催。
- ・協力委員の中津川浩章氏にキュレーションを依頼。バランス調整等の最終的な作品選考、企画、設営業務に協力していただいた。
- ・設営作業は中津川浩章氏の協力の下、TAMAP土〇メンバーを中心に実施。
- ・ネットワークに参加していない団体も設営・搬出作業に参加していただくことができた。
- ・開催初日に実施したオープニングセレモニーには作家本人らを招待し、テーブルカットを行い、新聞社等の取材に応じた。
- ・展示されて終わり、ではなく作家本人を含めた施設利用者が展示会の鑑賞する機会が持てるよう支援した。また、福祉施設職員が鑑賞する機会にもなり、美術への興味の幅が広がる機会となった。

●来場者の反応や感想

外部の評価も高く人気のある作家から、「これはアート？」と議論を呼ぶような作品まで一堂に展示することができ、その質の高さや多様性に対して多くの感想をいただいた。初企画として来場者投票を実施したことから、作品一点一点に対する来場者の見方の変化もあった。また今年度は広報にも力を入れ、マスメディアからの取材もあり来場者数も昨年度と比較して大幅に増

加した。(昨年度来場者数：1,313名)

以下、感想の一部を抜粋。

・新しく知る作家さんに刺激を受けたり、知っていた作家さんの表現の変化に驚いたりしました。

・作家さんが自身の作品の説明を誇らしげにされているのも印象的でした。
・日常の作者の手から生まれるもの、ちぎられた紙コップや小さく破ったダンボールを丸めたものなどを見ていてストーリーを感じられました。展示も工夫されていて、とても素敵でした。

④タイトル：「うふっ♥埼玉でまたまたこんなのみつけちゃった♪」

会期：平成30年2月7日(水)～2月12日(月・祝)

出展者数：(障害あり 37名/障害なし 0名)計 37名

来場者数：(障害あり 名/障害なし 名)計 413名

※障害有無での集計はしていませんが、約60%は障害のある人です。

取組について：

●支援センターの展示会として留意した点

・12月に開催した障害者アート企画展で実施した「来場者投票」を基に上位10名の作家を大きくピックアップして展示。

・会場となった北西部地域のフォロー。

・施設に所属していない個人で活動を行なっている作家によりスポットが当たるよう、トークイベントの登壇や、会期中毎日絵画制作をしてもらう、といったライブパフォーマンスの機会が持てるように配慮した。

当該都道府県のどのような特性をいかし、あるいは課題を意識して企画をしたのか

・北西部の作家を中心に、企画展からセレクトされた作家を展示。より深まりのある展覧会として企画した。

・アーティストの数、層の厚さ、作品のクオリティを県北西部に広める。

・担当支部を主体とし、地域間の連携力の向上を図った。

●どのような人々関わったか

・会場スタッフ業務は、埼玉県北西部地域の施設職員が中心となり、TAMAP±メンバーで全体をバックアップしながら実施した。

・協力委員の美術家である中津川氏にキュレーションを依頼。作品選考、企画、設営業務に協力していただいた。

・アーティストトークには出展作家本人・ご家族・施設職員が登壇。大勢の来場者が集まり、作家同士が互いの作品への感想を伝え合うといった場面もあった。観客からも作家本人やご家族がどのような思いで制作をしているのかを聞くことができ、感動したといった感想があった。

●来場者の反応や感想

会場が駅から離れた場所にあり、平日の来場者数は他の展覧会と比較して少なかったが、最終日のアーティストトークの日には多くの作家が参加し、来場者も1日で100名を超える大盛況となった。また、来場者投票上位10名に選ばれた作家をピックアップして大きく展示した企画も好評であった。

以下、感想の一部を抜粋。

・多彩な作品群には感心するばかり。その中で今回は宮原さん、福島さんの特異な才能に触れる事が出来た。特定の題材に対する徹底したこだわりの深さに底知れない才能を感じる。

<公演等>

タイトル：「あはっ★埼玉でこんなこともやっちゃった♪」

会期：平成29年12月10日(日)

出演者数：(障害あり 23名/障害なし 16名)計 39名

来場者数：(障害あり 名/障害なし 名)計 125名

※障害有無での集計はしていませんが、約30%は障害のある人です。

概要：障害のある方の表現活動を支援しているアートセンター集では、美術だけではない可能性や発掘を目的にダンスワークショップ・公演を企画した。ダンスグループ「ベストプレイス」主宰の竹中幸子氏を講師に迎え、ダンスワークショップを4回実施し、そしてダンスを通して場と時間を共有したその集大成を発表した。

取組について：

●支援センターの展示会として留意した点

・初の試みであったため、怪我や事故がないように十分に気を留め、参加者が楽しめる機会になれるよう配慮した。

・公演本番の出演可否は問わず、参加したい方のワークショップは全て受け入れ、障害のある方の新たな可能性の発掘ができることを目指した。

●当該都道府県のどのような特性をいかし、あるいは課題を意識して企画をしたのか
 ・ネットワーク参加施設のつながりを活かし、障害の有無や年齢性別を問わずに埼玉県加須市を拠点に活動するダンスグループ「ベストプレイス」主宰竹中幸子氏に講師を依頼した。

●どのような人々が関わったか
 ・全4回のワークショップ講師及び振り付け・構成・演出等を竹中幸子氏に依頼。
 ・ネットワーク参加施設よりワークショップの参加希望者、施設職員を募集。6事業所からの参加希望があった。ワークショップ参加人数は1回目19名、2～4回目は27名の参加があった。公演本番には17名が出演した。
 ・ベストプレイスメンバー24名も公演本番出演。

●来場者の反応や感想
 タマップダンサーズとベストプレイスのメンバー24名がコラボレーションする約40分のダンスプログラムを公演。観客からは僅か4回のワークショップとは思えない完成度や、一人ひとりを尊重した多様な表現に感動した、といった声を多くいただいた。
 以下、感想の一部を抜粋。
 ・みんなが主人公になっていきいきしていた。
 ・自分の施設でも活動の中で身体表現を取り入れてみたいと思う。
 ・日常の空間では様々な「出来なさ」のイメージに直結している形と動きなのに、舞台空間では強い「何か」を宿した身体として浮かび上がってくるように感じ、とても興味深い発見になった。

⑤協力委員会の設置
 ※別添「協力委員名簿」を作成するとともに、協力委員会の実施内容や実施回数等について具体的に記入すること。

第1回
 H29. 7. 21 / 社会福祉法人みぬま福祉会 川口太陽の家
 内容：協力委員の紹介、事業計画の説明、意見交換

第2回
 H30. 3. 13 / 社会福祉法人みぬま福祉会 川口太陽の家
 内容：事業報告、次年度の障害者芸術文化普及支援事業について、意見交換

⑥調査・発掘
 ※調査方法、調査に伴う専門的人材についても記入すること。

平成21年から県内の「障害者の芸術・文化活動」についての状況を知るために、「表現活動状況調査」を埼玉県が実施してきた。
 調査・発掘方法
 今年度はアートセンター集と県が連携し、調査内容を見直して調査内容の整理を行った。埼玉県が県内の事業所や特別支援学校等へ調査票を配布し、またHP等でもフォーマットを掲載。県が提出された回答を集約し、アートセンター集と協働でデータベース化した。

●調査内容
 氏名（アーティストネーム）、表現の種類、提出回数（H21年～）、障害区分、連絡先、施設名等
 作品画像の提出1～2枚
 題名、作品サイズ、素材、新作か旧作、既出か未提出、備考（作品背景、連作の有無等）

●明らかになったこと
 この調査は、作品なのかわからない、まだ評価されていない、施設側・家族もこれでいいのか悩んでいる作品も含めて回答を求めている。表現は本来自由なもので、芸術の枠を規定しない、価値を押し付けないことを大事にしている。
 調査開始当初は300通程だった回答数も、今年度は600通で過去最多となっている。そのうち約200通が初めての調査提出となった。継続してきたことにより、回答する施設が増えたことに加え、行為的なものや生活の中から生まれた表現等の提出も増加している。

表現の種類	数（回答件数）
絵画	469
立体造形	94
書	31
楽器	8
歌	6
写真	4
ダンス	2
演劇	1

回答地域としては34市町村からの回答となっており、29市町村からはまだ回答がないため、未回答地域への調査の周知が今後必要と考えている。

⑦評価・発信

※評価方法、発信方法、評価委員会の委員選考方法についても記入すること。

埼玉県と連携して実施した「表現活動状況調査」をもとに、参加型展覧会の中心となる埼玉県障害者アート企画展の選考会を行った。
 選考（評価）委員 47名
 埼玉県障害者アートネットワークTAMAP士〇メンバー 38名
 協力委員 9名

●選考（評価）方法
 作品選考するにあたり、以下のキーワードを提示。それを目安に付箋を貼りながら投票し、自分が心動かされた作品について「どこが魅力か」「どうして薦めるのか」「どう評価しているか」などを語り合った。

アートの	色、形、レイアウト、発想、コンセプト、造形的、デザインの、構図、構成、線の魅力、類型がない、新鮮等
福祉的	関わり、背景、障害による表現の違い等
情動的	心が動かされる、あったかい、かわいい、元気が出る、感動する、涙が出る等

大事にしたことは、美術の専門家と福祉施設職員が一緒になって、アートの視点と作品が生まれる現場の福祉的な視点を交錯しながら、みんなで語り合うこと。ただ作品を選ぶだけでなく、みんなでディスカッションすることで、双方に「気づき」が生まれ、また、多様な視点（見方・価値観）を交えて考える。

●得られた成果
 施設職員からは、担当する作家の作品について、創作の様子や作品が生まれた背景、本人にとってどんな意味があるかなどについても語り、その福祉的な視点が、作品をより深く読み取ること、表現やアートについて深く考えることへ誘い、作品の魅力がさらに見えてきたり、議論や選考が深まったりした。

●発信方法
 より詳細な情報が必要な作家については、後日聞き取り等を行ない、その上で作品を評価・選考し、最終的に12月の「埼玉県障害者アート企画展」にて97名の作品を展示した。

●課題
 調査票の写真が見にくく評価しづらいという点や、調査票の回答数が毎年増加している中、今後の選考（評価）方法を検討していく必要がある。

⑧都道府県との連携

※都道府県との連絡体制や都道府県と協力して実施した事業の内容について記入すること。

- (1) 協力委員：協力委員への参加。
- (2) 調査・発掘：表現活動状況調査の内容をアートセンター集と共に見直し、整理した上で県内の福祉事業所や特別支援学校等へ配布。提出された調査の集約。基本情報のデータベース化。
- (3) 展覧会：埼玉県障害者アート企画展共催。作品選考会への参加。オープニングセレモニーにて挨拶。企業への後援依頼。
- (4) 記録：アート企画展の図録作成。
- (5) 埼玉県障害者アートネットワーク：定例会への参加。イベント等の情報提供。県主催の展示企画への作品提供。
- (6) 広報：県の広報誌への情報掲載。県の記者クラブへのプレスリリース。
- (7) 文化プログラム：ダンス公演、展覧会（2回）の開催。

⑨障害者芸術・文化祭との連携

- (1) なら大会 広報連携
- (2) 埼玉県サテライト開催事業 バリヤフリーコンサート H30.1.8 広報連携

<p>※全国障害者芸術・文化祭やサテライト開催と連携した実績について、具体的に記入すること。</p>	
<p>⑩文化プログラム等について</p> <p>※東京2020参画プログラム、beyond2020への申請内容、取組実績などについて記入すること。</p>	<p>(1) 第6回近藤良平と障害者によるダンス公演「どうするのあしたのよていがきになるの」 H29. 10. 21/彩の国さいたま芸術劇場 (2) 鉄道画家 福島尚の世界 H29. 11. 3～11. 19/鉄道博物館2階スペシャルギャラリー (3) 障害者アート展「いきるつくる」 H29. 11. 25～12. 3/入間市文化創造アトリエ・アミーゴギャラリー</p>
<p>⑪その他</p>	

※下記(2)については、広域センターを実施した団体のみ記入すること

<p>(2) 広域センター(ブロックレベル)</p>	
<p>①相談窓口の体制(人数や勤務体制等)</p> <p>※支援センターに対する相談体制、未実施都道府県に対する支援体制を記入すること。</p> <p>※窓口担当が不在時の対応等についても記入すること。</p> <p>※専門家アドバイザーも含め、どのような相談体制で事業を実施したのか、できるだけ具体的に記入すること。</p>	
<p>②人材育成のための研修計画</p>	
<p>(ア)支援センターに対する研修</p> <p>※研修内容、回数、研修方法、講師等の実績についても記入すること。</p>	
<p>(イ)未実施都道府県に対する研修</p> <p>※研修内容、回数、研修方法、講師等の実績についても記入すること。</p>	

※(ア)と(イ)を同時に行っ
た場合などは、それぞれの
欄に標記し、注をつけるな
ど、明確に記入すること。

③関係者のネットワー づくり

※ネットワーク構築方法、
ネットワークを活用した具
体的な取組実績について、
できる限り具体的に記入す
ること。

④ブロック連絡会議の開 催

※実施団体向けの勉強会
や外部への報告会の内
容、開催時期等について、
実施した内容を具体的に記
入すること。

⑤障害者芸術・文化祭と の連携

※全国障害者芸術・文化
祭やサテライト開催と連携
した実績について、具体的
に記入すること。

⑥文化プログラム等について

※東京2020参画プログラム、beyond2020への申請内容、取組実績などについて記入すること。

⑦その他

※下記(3)については、連携事務局を実施した団体のみ記入すること。

(3) 連携事務局

①事務局の体制

※組織図等があれば添付すること。

②事務局の行った業務

※広域センターのとりまとめ役として実施した業務について、具体的に記入すること。

③全国連絡会議の開催 ※広域センター等向けの勉強会や外部への報告会の内容、開催時期について、実施した内容を具体的に記入すること。	
④障害者芸術・文化祭との連携 ※全国障害者芸術・文化祭やサテライト開催と連携した実績について、具体的に記入すること。	
⑤文化プログラム等について ※東京2020参画プログラム、beyond2020への申請内容、取組実績などについて記入すること。	
⑥その他	

※下記については、全実施団体が記入すること。

事業の実施により得られた成果の今後の活用について

※事業の実施により得られた成果の今後の活用方法について具体的に記入すること。

埼玉の本事業では、「福祉の現場から、障害のある人たちの表現の魅力を発信し、そのアートのパワーで、よりよい未来をつくっていこう!」といった思いを一つに、県や協力委員、TAMAP±〇メンバーをはじめ、作家や家族、さまざまな機関や専門家、地域の人たちなど、多くの人々が力を合わせて活動している。

平成30年度も、9回目を迎える「埼玉県障害者アート企画展」を軸に、みんなで知恵を出し合い、一つひとつ課題を解決しながら活動していきたいと考えている。

表現活動の意義、「埼玉方式の障害者アート支援」をどう発信するのか、その先の未来図、ビジョンをどう描くか、検討を重ね、活動を計画していく。埼玉に生まれる多様な表現と共に、みんなで社会に「問い」を発信し続けながら、自らも考え、また、より多くの人と表現から得る感動や驚き、学び、支援の喜びや活動の楽しさを共有していきたい。

(1) 埼玉県障害者芸術活動支援センター「アートセンター集」
本活動の成果もあり、今後も益々、様々な相談が増えると予想される。様々な協力機関の連携や組織内の知恵を活かして、引き続き丁寧に対応していきたい。

個別の課題については、多くが地域の教育、支援学校や福祉施設の在り方など、社会全体の課題につながるため、今後は、定期的に事例検討会を行うなど地域のニーズ(課題)を浮き彫りにして、ネットワーク力を活かし、より広く地域全体の課題として共有していきたい。

(2) 福祉の現場から発信する人材育成
何のために、誰のためのアート活動なのかという各々の施設の考え方を作る事、関わる人たちの意識を変えることという根幹の部分の“人材育成”が、障害者アートの裾野を広げるために必要なことである。引き続き当法人の強みでもある、現場がある、作家が120名もいるという実績と経験を活かし、福祉現場の人にとって深い意味での人材を育成していくために一翼を担いたい。

福祉の理念と支援の基盤により、基本を広めながら、一人ひとりが各職場の課題に合わせた支援力アップを目指せるような、段階的なプログラム作りを検討する。

(3) 障害者アートを一部の特別な人たちだけのものにしないために
「埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±〇」をはじめ、他分野他業種の方々と協働で障害者の芸術振興を実施していく。埼玉に生まれる多様な表現と共に、どんな障害のある人にも表現の可能性はあるという思いを共有していく。

(4) 埼玉方式の障害者アート支援を全国に広めていく
この取組を続けることで、自身の生きがいが生み出され、人によっては才能を開花させることができる。また、一般の人の障害者への偏見、併せて身近な家族、施設職員らが知らず知らずに陥っている障害者への能力軽視をなくすることができる。

この「福祉」と「芸術」の両方に着目して効果を上げる「埼玉方式の障害者アート支援」を取り組みで更に深化させ、汎用性の高い障害者問題の解決モデルとして全国に広めていきたいと考えている。

今年度の成果は報告書やホームページを活用し発信していくことと、次年度は簡単なテキストブック作成を検討している。